



「ピースボート」主催  
エイボン教育賞を受賞

辻元 清美さん



た子供に向かい「ふろおけのお湯をぶっかけた」こともあった。

とはいえ平和、国際貢献を、しかめつらで論じるつもりはない。東京・高田馬場の事務所は清潔感のあるモダンな内装。服装のおしゃれにも気を使う。「暗くてダサイNGO（非政府組織）になんて、今どきの若い人はついてこな

政府に見放された不安や日本人との交流への期待など、生の声を聞いてきた。

来春は、九一年に引き続き二度目の世界一周のクルーズを予定している。世界の紛争地の市民に乘船してもらい、また独自の国連改革法案を米ニューヨークの国連本部に提出するなど、企画は盛りだくさんだ。参加申込者はすでに六百人近く集まった。特にOLや看護婦など、二十代の女性が多いという。

## 「平和」活動は明るくおしゃれに

「十年間、楽しくやってきただけ。賞なんてもらっていいのかなあとと思って」。授賞式の席上で、早口に飾らない気持ちで語る辻元さん(33)。「学術、教育の場での顕著な活躍」という受賞理由が、少しくすぶったそらだ。

激動の世界を客船でめぐり、市民レベルの交流を通じ

て平和実現を目指す市民団体「ピースボート」主催者。大生時代の初航海を皮切りに、これまで十五回のクルーズを実施した。アジアを中心に戦争の傷跡、貧困や飢餓の

現状を見て回り、船内で討論し、救援物資を届ける。延べ参加人数は六千人にのぼる。在日韓国・朝鮮人の多い大阪に育ち、子供のころから差別問題を身近に感じて育った。正義感の強さは人一倍。銭湯で朝鮮人をからかっていた

「い」というのが持論だ。行きたいとなったらどこにでも出掛けていく。九一年のソ連クーデター直後、政府の自粛要請を振り切って北方四島へのビザなし渡航を決行。住民たちと出会い、モスクワ

目下、マンションで一人暮らし。平日は企画や渉外で朝から夜まで働き、休日も講演で全国を飛び回る。「地球を飲み込んで、ここにあるような気がしてるんです」と、おなかをさすって笑った。